ONE WORLD Info 英語教育 通信

校種間の連携
新学習指導要領下で小中高連携を図るために … 金森 強
外国語を通じてコミュニケーション能力の素地・基礎を養う指導を求めて … 後藤 喜朗
高校新入生アンケートから考える中高の連携 … 豊嶋 正貴
小学校教育課程の中の外国語活動 … 樫村 雅子
とっておきの英語 4　You are my best friend. … 野田 小枝子
今ドキ英語事情　All in the family … Peter J. Collins
編集部からのお知らせとお願い

教育出版

新学習指導要領下で小中高連携を図るために

松山大学　金森 強

1 はじめに

新しい学習指導要領においては，小学校には「外国語活動」が導入され，高等学校では授業を実際のコミュニケーションの場とするために「主に英語で英語を教える」ことや新しい教科名による科目構成の変更等大きな変化があったが，中学校においては授業時数と指導語彙数の増加だけであり，これまでと大きく変わらないという声を聞くことがある。しかし，それは間違った理解である。間にある中学校がそのままでよいはずはない。中学校こそが本格的な英語学習の始まりであり，しっかりとした基礎力育成のための大切な時期なのである。小学校，高等学校をしっかりとつなぐ役割は重要である。

2 「外国語教育」に求められること

外国語を教えると言うと，目標言語でのコミュニケーション能力の育成，すなわちスキル育成だけを考える人が多い。しかし，グローバル化が進む現代，外国語教育に求められるのは，多様な文化や価値観を持つ人々に対して，偏見を持たずにコミュニケーションを取りながら，豊かな人間関係を結び，さまざまな人々と協力して共存・共生していく能力の育成である。

欧州では複言語・複文化主義に応じて，さまざまな母語を持つ子どもたちが，ことばへの気付きや出合いを通して，母語以外の言語や他の文化に対する「開かれた心」を育てる言語教育が進められている。外国語を用いて人と関わることを通して，言語運用能力のみならずコミュニケーション・言語の大切さや，異なる言語・文化，そしてお互いの命の尊さにまで気付かせることができるような言語活動が期待されているのである。

今回の学習指導要領改訂にあたっては，小学校から高等学校までの長い期間をかけて育む外国語教育の視点から，「コミュニケーション能力の育成」という一本の柱を中心に，各段階において育むべき力が考えられている。その実施にあたっては，それぞれの接続・連携を図っていく必要があることは言うまでもないが，特に大切なのはどのようなことであろうか。

3 求められる「小中の接続・連携」？

小中の接続・連携の大切さが叫ばれている。しかし，連携を進めるために小中の教員を中心とする連絡協議会を設置したところ，「アルファベットを指導してほしい」，「各学校で同じ言語材料を，同じ程度指導してきてほしい」，「発音の指導をしてほしい」等，中学校英語教員から「外国語（英語）科」との直接的な接続や連携を求められ，小学校側からの反発をかってしまったところもあると聞く。

『英語ノート』や“Hi, friends!”と中学校の英語教科書には，言語材料や言語の働き，使用される場面について共通部分が見られる。そのため中学校英語教員は，小学校にもスキル（技能）の向上を求める傾向がある。しかし，外国語活動の目標や評価規準，週1時間という授業時数を考えれば，技能面での接続や連携を求めることは的外れと言えるであろう。

小学校外国語活動に求められるのは，スキルの定着ではなく，活動を通したコミュニケーションや外国の文化への興味・関心の向上である。期待できるのは，外国語（英語）を使用したコミュニケーション体験が中学校の学びへの動機づけとなることと，音声受容

語彙やフレーズに慣れるといった程度である。つまり，関心・意欲面の評価を中心とする小学校と，４技能の基礎的な能力を育むことをねらいとする中学校との接続や連携が，容易にできるはずはない。評価（規準）を考えると，関心・意欲の面における接続は可能であっても，知識やスキル面における接続は難しいと言わざるを得ない。

最近では，小学校段階にまでCan-doリストを用いた評価や指導が推奨される傾向にあるが，現行の小学校学習指導要領に合うとは言えない。指導する側がポートフォリオやルーブリックを用いた指導や形成的な評価に慣れていない場合，下手をすると「できないこと」を子どもが早い段階で意識することで，英語嫌いが増える可能性もある。言語学習には継続性が大切であり，結果を求めるのは後でよい場合が多い。教えたことがすぐ身につくように見せるための評価や指導は，「百害あって一利なし」の結果を招きかねない。スキルの向上を目ざしたための単純な繰り返しや暗記学習により，児童が英語を学ぶことへの興味をなくしてしまっている小学校のケースも報告されている。

4 中学校で素敵な仕切り直しができるかどうか

新しく作られた中学校の教科書を見ると，ほとんどにおいて，最初の数ページが外国語活動との接続を意識した内容となっている。いろいろな工夫がなされているのであろうが，大切なことは，小学校段階で英語への苦手意識を持ってしまった生徒に，再チャレンジの機会を与えることである。また，読み，書きへの興味を湧かせるために，文字言語としての英語学習の楽しさを知らせること，母語との構造的な違いに気付かせながら文法の知識を学ぶ楽しさを知らせること，そして，知識（語彙や文法規則）や技能を定着させるための新しい学習ストラテジーと学習習慣を身につけさせる指導を行うことである。そのような授業を意識的に実施することなしには，英語を学ぶことへのモチベーションを高めることはできないはずである。

5 中高の接続・連携について考えると

主に英語で指導を行う高等学校の英語授業への期待と関心は高い。自分が中学校英語教員でよかったと安心している場合ではない。保護者や社会の目は確実に中学校教員にも向けられる。クラスルームイングリッシュの使用をはじめ，さまざまな活動を通して生徒が英語に触れる機会を増やす工夫が求められるはずであり，当然，教師が英語を使用する機会も増えるだろう。

また，実際に英語を使いながら運用能力を育む高校の英語授業では，コミュニケーション活動を促すタスク活動やプロジェクト活動，スピーチ，ディベート等，さまざまな言語活動が行われるはずである。中学校においても高等学校の言語活動につながる多様な活動・学習体験を持っておくことが望ましい。中学校教員の腕の見せどころである。

6 「５つの提言と具体的施策」

文部科学省が設置した「外国語能力向上に関する検討会」から，「国際共通語としての英語力向上のための５つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」が昨年６月に出されている。そこには，これからの日本の英語教育の方向性と誰が何を進めていくべきかが具体的に示されている。子どもたちにどのような教育を提供すべきなのか，そのために教員として何をすべきなのか，しっかりと考え準備をしておく必要があるだろう。変化していくことに十分に対処できていなければ，人々の教育への信頼を勝ち得ることはできない。医者と同様，教師も最新の基本的な理論や知識を持ち備えていなければ臨床・現場における望ましい対処ができるはずはない。アップデートしない／できないでは許されないのである。

学習指導要領や検定教科書がどんなに変わっても，日々の授業の省察から生まれる教師一人一人の授業改善への取り組みに勝る改革はないはずである。

特集：校種間の連携

外国語を通じてコミュニケーション能力の素地・基礎を養う指導を求めて

～コミュニケーションを図る楽しさを実感する効果的な小中連携の在り方～

岐阜市立東長良中学校　**後藤 喜朗**

1 はじめに

外国語活動が始まり，コミュニケーションの喜びを実感できる活動が展開される一方で，「小学校教員の負担感」「英語免許がない教員の不安」「校種間連携の在り方」「中学校入門期指導の工夫」「中１の授業改善」等の課題がある。多忙な教育現場にて，いかに効果的，計画的，系統的に外国語活動及び英語の指導をするのか，そして，児童生徒に「コミュニケーションを図る楽しさを実感」させるかを最大の使命ととらえ，本研究を実践した。

2 主題設定の理由

生徒は，小学校で外国語の音声や表現に慣れ親しみ，コミュニケーションへの素地を身に付け，外国語学習に興味・関心を抱いている。その一方で書くことや単語量増加の不安など，「英語学習の中１ギャップ」という思いをもっている。そこで，「連携」をキーワードとし，上記の研究主題を設定し，下記の「願う児童生徒の姿」「研究仮説」を考えた。

【願う児童生徒の姿】

小学校：英語表現に慣れ親しみ，コミュニケーションを図る楽しさを実感できる活動を通して，コミュニケーション能力の素地を身に付けた児童

中学校：既習の表現を駆使して，コミュニケーションを図る楽しさを実感できる活動を通して，コミュニケーション能力の基礎を身に付けた生徒

【研究仮説】

日常的な小中連携を通して，９年間を見通した指導計画の工夫改善を行い，コミュニケーションを図る楽しさが実感できる活動を行えば，コミュニケーション能力の素地・基礎を身に付けることができる。

3 研究内容

（１）校区内の小学校間交流及び効果的な小中交流の在り方

①小学校外国語活動担当者と中学校英語科部員との担当者会の位置付け

教員自身の負担感の軽減や各校の校務に影響がないように午後４時から午後５時までを担当者会の時間とした。主な内容は，下記の３点である。

ａカリキュラムの交流

小学校と中学校のカリキュラムを交流することにより，互いの学習内容を確認した。

ｂ小学校間の指導内容の統一

２つの小学校間の指導内容を統一するため，単語及び英語表現（言語材料）の共通化を図った。具体的には，下記の通りである。

・色の単元では，赤（red），青（blue），黄（yellow），緑（green），黒（black），白（white）を２つの小学校で必ず学習すること。

・相手の言った英語を必ず繰り返すこと。繰り返すことによって対話を継

続することができる。

A: I like to play basketball.

B: Oh! good!, you like to play basketball.

c 参観授業の研究会の位置付け

学習指導案を作成するのではなく，日常の外国語活動及び英語の授業の参観を通して，感想，意見，気付いたことを気軽に言い合える研究会を位置付けた。

②中学校英語科部員による小学校外国語活動研修会の実施

夏季休業日を活用し，中学校英語科部員が，小学校教員への研修会を行った。“Hi, friends!”の「道案内をしよう」の単元を取り上げ，実際の学習活動を展開した。小学校教員が児童役をしたことで，子どもの立場に立った研修ができた。また，顧問教頭が学習指導要領の解説，『英語ノート』の実践等，外国語活動の理論編の講義を行った。

③保護者参観を活用した授業参観の実施

小学校外国語活動担当者と中学校英語科教員による日常的な交流を目指し，授業参観の折に互いの学習を参観するようにした。この取組を通して，学習指導案を作成しないで授業交流ができ，教職員の負担感を軽減することができた。

（2）９年間を見通した指導計画の作成

小中学校の教員が，それぞれの学習内容を理解し，指導に活かすという意味から５，６年生の“Hi, friends!”と中学校教科書との系統図の作成を行った。

（3）小学校での指導を踏まえた中学校１年生の指導の在り方

入学当初の生徒へ外国語活動及び英語授業に係るアンケートを実施し，英語学習への願いや意識を分析した。また，「教科シラバス集」（本校作成）の中の「英語を学習するにあたって」を使って，オリエンテーションを行った。自己紹介や学習の仕方の説明で終わりがちなオリエンテーションではなく，英語の歌，チャンツ，ペアでのインタビュー等の活動を位置付け，中学校での魅力的な授業開きを行うことができた。

4 おわりに

中学校の１学期の学習活動を終えた生徒は，下記のような感想を書いている。

> 私は，最初英語の学習が不安でした。小学校では，ゲームや歌で楽しかったけれど，中学校では，書くことが心配でした。でも，今は英語の学習が楽しいです。自分の英語が友だちに伝わったり，仲間の英語が分かったりするとすごく嬉しいです。小学校で習った表現を使って外国人の先生と話ができました。将来通訳になりたいので，２学期からの英語の授業も頑張りたいと思います。（現東長良中学校１年生　Ａさん）

上記のように中学校の英語学習が不安であった生徒も仲間とコミュニケーションを図る活動に喜びを感じている。こうした生徒の声，研究の歩みを受け，今後は，高等学校も巻き込みながら小中高の連携を活かした英語教育の実践を進めていきたいと考えている。

【ご案内】

岐阜市立東長良中学校

「わが校発表会」（研究発表会）

平成24年11月16日（金）

高校新入生アンケートから考える中高の連携

文教大学付属中学・高等学校　**豊嶋 正貴**

1 はじめに

高校に入学したばかりの生徒は，中学英語とのギャップに戸惑うということがよく言われる。近年，「中高連携」は英語教育における大きな課題の１つであるが，実際，中学，高校，互いの現場で「連携」が意識されることはほとんどないというのが現状ではないだろうか。

私自身もかつてはあまり中高の連携を意識していなかった。しかし，前任校が中高一貫化し，内部進学生と外部進学生の混じり合った高校１年生を担当することになった際，中高をうまく連携させ，どう生徒の力を伸ばしていけばいいかという問題に直面した。

そこで高校に入学してくる新入生（高校１年生）の英語に対する学習履歴や意識，高校英語への期待などを把握するため行った調査が「第１回高校新入生アンケート」であった。

2 第１回高校新入生アンケート

第１回新入生アンケートの結果は，入学してくる生徒の情報だけではなく，私自身に多くの疑問と可能性を投げかけた。

入学してきた生徒120名のうち，96％（115名）が塾に通い，その生徒のほぼ100％が塾の英語に対して高い満足度を示していた。96％もの生徒が塾に通っていた理由としては，前任校が中堅の私立女子校であり特殊な環境にあったこと，そして，地域的にも郊外に位置していることを反映したものというのが私の分析である。

しかしながら，塾の満足度の高さは一体何に起因するものなのか。また，偏差値による格差，国公立，県立，私立や共学，男子校，女子高といった校種は，アンケートに反映されるのか，この結果から中高の連携の一助となることができるのではないかということが第２回アンケートの実施につながった。

3 第２回高校新入生アンケート

第１回アンケートの結果は，勤務校１校という限られた生徒たちを対象に実施したため，その応用の範囲は限られたものであった。応用範囲を広げるため，第２回高校新入生アンケートは，地域，校種，偏差値の観点から幅広いサンプルを得ることを目的に行った。

第２回高校新入生アンケートは，神奈川県立高校（共学）（以下，A校），埼玉県立高校（共学）（以下，B校），埼玉県私立高校（共学）（以下，C校），東京都私立高校（男子）（以下，D校），埼玉県私立高校（女子）（以下，E校），東京都国立高校（女子）（以下，F校）の高校６校に依頼し，入学して間もない高校１年生，計692名を対象に実施した。

4 第２回高校新入生アンケート結果

高校新入生（中学を卒業したばかりの生徒たち）に対して行った，第2回新入生アンケートの集計結果を抜粋して以下に示す。

＜学習者自身について＞

（1）英語は好きですか？（N=692）

	人数
好き	320
あまり好きではない	274
嫌い	98
計	692

A. 好き（N=320; 46.2%）

理由：

①英語を話すことが楽しいから／日本語以外の言葉を話せるようになるから(n=78)

②もっと外国の人々と交流したいと思うから（n=45）

③楽しい，音楽が好き，面白い（n=34）

④将来役立つから［国際的な視野が広がる］(n=26)

⑤文章が読めると楽しいから（n=17）

⑥単語，熟語を覚えるのが好きだから（n=15）

⑦その他（n=54）

B. あまり好きではない（N=274; 39.6%）

理由：

①難しい・できない（n=65）

②文法・単語を覚えられない（n=45）

③語順［文法］が難しい［文を作れない］（n=36）

④英文を読むのが苦手だから（n=22）

⑤日常使わない言葉だから覚えにくい，よく分からない（n=21）

⑥苦手意識が強いから（得意ではないから）(n=18)

⑦その他（n=39）

C. 嫌い（N=98; 14.2%）

理由:

①難しい・できない（n=34）

②語順［文法］が難しい［文を作れない］（n=10）

③英文を読むのが苦手だから（n=4）

④日常使わない言葉だから覚えにくい，よく分からない（n=6）

⑤文法・単語を覚えられない（n=13）

⑥その他（n=23）

＜考察＞

英語が「好き」の理由としては，「英語を話すことが楽しいから」(n=78）の回答が最も多く，次いで「もっと外国の人々と交流したいと思うから」(n=45)，「楽しい，音楽が好き，面白い」(n=34)，「将来役立つから／国際的な視野が広がる」(n=26)，「文章が読めると楽しいから」(n=17）など，英語が使えて楽しい，英語が使えると将来役に立つと回答しており，英語の授業を通して生徒が達成感や伸長感を感じている傾向がある。それに対して，「あまり好きでない」「嫌い」の回答としては，「難しい・できない」，「文法・単語を覚えられない」，「語順が難しい・文を作れない」「英文を読むのが苦手」など，理解できない，覚えられない，使うことができないなど回答に多くの共通点があった。

英語が「好き」と回答した生徒は，授業中に英語を使うことで英語の楽しさや面白さを感じていたり，外国人との交流を通して興味関心を広げたりといった経験をしている。つまり，英語をアウトプットすることにより，何らかの達成感や伸長感を経験したことがある傾向が見える。それに対して，英語が「あまり好きではない」「嫌い」は，インプットからアウトプットの過程でつまずいている傾向がある。つまり，単語が暗記できない，文法が理解できないなど英語をインプットすることができないため，アウトプットに結びつけることができず，結果，成功したという体験がないことが苦手意識，嫌悪感へとつながる傾向を示している。

（2）塾に通って英語を勉強していましたか？（N=678）

	観測度数
塾に通っていた	583
講習のみ通っていた	17
塾に通っていない	78
合計	678

中学時代に塾に通っていた生徒は678名

中，86％（583名）であった。講習のみ通っていた生徒は，2.5％（17名）であり約88.5％（600名）の生徒が塾を利用していたことが分かる。それに対して塾に通っていない生徒は，11.5％（78名）であった。

（３）塾での英語はどうでしたか？(N=579)

	観測度数
よかった	489
よくなかった	75
学校のほうがよかった	15
合計	**579**

A. よかった（N=489; 84.5%）

理由：

①１つの単元を細かく教えてくれるので，わかりやすかった（n=113）

②分かるまで１人１人に詳しく教えてくれた（n =49）

③楽しかった，学校では教えてくれない深い所がよく分かった（n =32）

④文法の解説をしっかりしてくれた（n =23）

⑤先生がよかった（熱心に教えてくれた・厳しかった）(n=21)

⑥丁寧に教えてくれて，どんどん分かるようになったから（n=18）

⑦教科書にそって予習・復習をやってくれた（n=17）

⑧ポイントをしっかりとおさえていた，試験に役立った（n=14）

⑨力がついたから（n=11）

⑩先生の発音がよかった（n=10）

⑪その他（n =46）

B. よくなかった（N=75; 13.0%）

理由：

①理解できなかったから（n=3）

②先生がこわい，よくなかった（n=3）

③進度についていけなかったから（n=2）

④その他（n =5）

・成績が変わらなかったから

・質問できなかったから

・英会話のみだったから

・文法中心だったから

・単純に英語が楽しいと思わなくなったから

C. 学校の方がよかった（N=15; 2.6%）

①塾がよくなかった（n=2）

②その他（n =6）

・わけも分からず覚えて理解した

・塾はプリント授業ばかりだったから

・塾の授業は難しかったから

・会話やゲームがあって分かりやすい（塾は文法だけ）

・塾は単語・文法の暗記だけの授業だったから

・塾では詳しく教えてくれなかったから

＜考察＞

全体の約９割の生徒（600名）が塾に行った経験を持ち，その内の85％（489名）が塾での英語の授業はよかったと回答している。その主な理由としては，「１つの単元を細かく教えてくれるので，分かりやすかった」（113名），「分かるまで１人１人に詳しく教えてくれた」(49名)，「楽しかった，学校では教えてくれない深い所がよく分かった」（32名），「文法の解説をしっかりしてくれた」(23名）というものであった。それに対して，「よくなかった」「学校の方がよかった」と回答した15.6％（90名）の理由としては，塾の授業についていけなかった，理解できなかったというものがあった。

Benesse教育研究開発センター（2009）は，全国の中学生2,967名を対象に英語学習に対する意識調査を行い，７割以上の中学生の英語学習のつまずきや苦手意識は，「文法が難しい」「英語のテストで思うように点数がとれない」「英語の文を書くのが難しい」と感じていることにあるとまとめている。

塾が支持される理由は，この英語学習のつまずきを，「わかりやすく丁寧な指導」，「熱心さ」，「面倒見のよさ」で克服させているためであると考察することができる。この結果

からも，授業を通して達成感や伸長感が得られたかどうかが，学校，塾にかかわらず英語の授業の満足感，好き嫌いにつながると指摘することができる。

5 まとめ

第２回高校新入生アンケート結果は，東京都，神奈川県，埼玉県にある６校を対象に行ったため，この結果を一般化し全国にある全ての高校にあてはめることは困難である。しかしながら，この調査を通して明らかになった中高連携の問題点を指摘する。

紙面が限られているため全ての集計結果を掲載することはできなかったが，本調査を通して，見えてきた中高連携の大きな障害は，「生徒の学習履歴」「高校英語に対する期待」と高校英語教師の認識との間に大きな開きがあるということである。

「英語が好き」だと回答した生徒は46.2％であり半分にも満たないということ，「予習をしていた」，「復習をしていた」生徒もそれぞれ半数にも満たず，その学習方法に関しても，「単語の意味を調べる」，「単語の暗記」と限られたものであった。つまり，高校の英語教師は，生徒の半数は英語が嫌いであること，そして学習方法もほぼ確立されていないということを念頭において授業を行う必要がある。

「高校で伸ばしたい英語技能」という項目では，新入生は英語の４技能の力を伸ばすことを期待している。しかし，特に進学校では大学入試を目標に，オーラルコミュニケーションやライティングの授業で，文法指導のみが行われていることも多い。ここに新入生の期待と高校の英語教師の認識との間には大きな開きがあることを指摘することができる。この認識の溝が中学英語とのギャップを生み，中高連携の障害の１つとなっているのではないだろうか。高校の教師はこの点をしっかり認識しておくことが必要である。

英語に対して苦手意識を持っている半数以上の新入生に対してどのような授業を展開していくか，今回のような新入生アンケートを毎年各校で実施し，調査結果を認識した上で，シラバスやCan-doリストの作成，教材研究を行い，新入生を受け入れる準備を行うことが高校教師に求められる。また，中学校では，スピーチをはじめ，様々な活動や取り組みがなされている。その流れを大切にしつつ，授業展開を考えることも重要であろう。さらに，約90％の生徒たちが，「分かりやすい授業」や「丁寧な指導」を求めて塾に通った経験を持っており，その経験がそのまま高校英語への期待につながってきていることも意識しておかなければならない点である。

それでは，中学校の英語教師はどうであろうか。高校における新入生アンケートは，そのまま中学の英語教育のゴールとして捉えることができる。中学時代に半数以上の生徒が英語嫌いになっていること，英語の学習方法についても予習や復習の習慣がついていないこと，教科書CDを活用しないことなど，学習方法に関しては指導が十分になされていないようである。また，授業に関しても，印象に残っている授業はゲームやAETの先生といったものであり，教科書の内容に関してはあまり印象に残っていないようである。

このアンケートは私たち教師に中学校，高等学校それぞれの授業の問題点と課題を明らかにした。中高の現場にいる教師がこの調査結果から見えるたくさんの課題を認識し日々の授業に生かしていくこと，そして，生徒の現状や期待を理解した上で授業計画や授業改善を行っていくことが中高を連携させる上で大切であり，またこういった情報をもとに，中学校と高校の英語教師が話し合いの機会を持ち，お互いの情報を共有する機会を持つことも，連携を考える上で重要な要素と言えよう。

小学校教育課程の中の外国語活動

千葉県柏市教育委員会指導課　指導主事　**樫村 雅子**

1 はじめに

新学習指導要領の全面実施に伴い，各小学校で外国語活動が実施されていますが，５・６年の担任の先生方から外国語活動を負担に感じる声も漏れ聞いています。その大きな原因が，外国語(英語)の専門ではない，又は専門的に学んでこなかったという不安ではないでしょうか。小学校の外国語活動は，中・高等学校等における外国語科の学習につながるコミュニケーション能力の素地作りとしての位置づけですが，あくまで小学校の教育課程の一環であり，他の教科と同様，目指す児童像実現への一手段です。先生方には小学校の教師としての自負を持って，児童が学習への意欲を高められるよう，児童とともに外国語を楽しみ，前向きに取り組んでもらいたいと思います。

2 ひと工夫の効用

『英語ノート』の登場で，各校バラバラだった指導に一つの標準ができました。その後“Hi, friends!”に改訂され，付属のDVDにはたくさんのワークシート，カード，映像資料などが収められています。指導案に沿って授業をすれば，年間の指導時数は確保できます。しかし，他教科の指導では目の前の児童の実態に即して授業を組み立てているはずです。普段駆使している授業力や児童に対する観察眼を外国語活動にも生かせれば，もっと楽しく，意義深い活動になります。小学校教師にとって大きなアドバンテージは，担任として児童をよく知っていること（人間関係や個々人の特徴，流行や興味を持っていることなど)，その年度で教える教科内容や前年度までの既習事項について知っていることです。

“Hi, friends!”をベースにしながらも，他の活動や教材へ一部変更したり，他教科と連携させるなどのアレンジは小学校の先生方の得意なところです。そのようなひと工夫がある活動の方が，より外国語活動の目標に近づくように思います。

以前，私は別表のような活動を行いました。

単に英語が言えるようにするだけの活動では，英語を習うなどしてよくできる子だけが

外国語活動案（色）

1　ユニット名　「色について知ろう」（２時間扱い）

“Hi, friends!”との関連

“Hi, friends１”　Lesson 5　What do you like?　色や形の言い方を知ろう

“Hi, friends２”　Lesson 5　Let's go to Italy.　世界の国々　世界の生活

『英語ノート』との関連

『英語ノート１』Lesson 5　I don't like blue.　いろいろな衣装を知ろう

『英語ノート２』Lesson 6　I want to go to Italy.　行ってみたい国を紹介しよう

2　ねらい

・積極的に，英語の説明を聞き取り，理解しようとする。行動に移してみる。

・色や国の言い方を知り，活動の中で英語を使ってみようとする。

・文化や感じ方の違いを知る。　・言葉と体験活動　・他者理解　・協同

3　活動の流れと他教科との関連

第１時

学習活動（時配）	準備・留意点	他教科との関連
1.　あいさつ（３分）		
2.　虹は何色？（１５分）	ワークシート①	
①日本・・7色（赤橙黄緑青藍紫）	色鉛筆	異文化理解
②そのほかの国では		漢字
英語・・６，7色(vibgyor) red, orange, yellow, green, blue, indigo, purple		
ドイツ・・５色，ロシア・・４色		
沖縄・・２色		
③色の言い方の練習	色のカード	音楽
④song: rainbow	CD	
3.　色を混ぜてみよう（２５分）	牛乳キャップ（前日の給食時から準備しておく），タコ糸，マジ	図工（コマ作り，混色の体験）
①色の足し算		
②好きな色を混ぜてみよう		

活躍したり，逆にそのような子にとっては易しすぎて興味を失ったりすることも考えられます。どのレベルの子も，同じように驚いたり，発見したり，楽しんだりできるように，体験的活動を意識して取り入れました。具体的には，ブンブンゴマの作成によって混色の結果を確かめたり，見慣れない地図を使ったりしました。意外な児童がこま回し名人で皆が教えてもらうために列をなしたり，帰国子女でもオーストラリアの上下逆の地図では目的の国が見つけられなかったり，といろいろな「想定外」があり，児童は楽しんでいました。

また，協同という視点から，わざと地図帳を男女ペアに１冊しか与えないような工夫もしました。児童全員に自分の出席番号を英語で順次言わせる課題では，どうすれば速くできるかを自主的に考え，「周りは静かにしよう」「発言する人に体を向けて注視しよう」「大きな声ではっきり言おう」「リズムをとろう」などの意見が出ました。コミュニケーションの大切な要素を，教師の教え込みではなく，児童自ら気付いたということです。その上，声の小さな友だちや緘黙児の周りからは「僕も一緒に言います」という意見が自発的に出て，チームワークが向上し，タイムが縮まったときにはみんなで大いに喜び合う姿が見られました。英語が言えただけでは味わえない達成感だったのではないでしょうか。

・ブンブンゴマ作り ・何色と何色で何色ができたか発表 4．あいさつ（２分）	ックペン，千枚通し，テープ	

第２時

学習活動（時配）	準備・留意点	他教科との関連
1．あいさつ（３分） 2．色の復習（５分） ① song: rainbow ② 色のカードを使って 3．国旗の色ぬり（１０分） ① 英語を聞きとりながら色をぬる ② どの国の国旗か調べる ③ 旗の持つ意味を知る 4．国の場所探し（１５分） 世界地図の中から指定された国を探す （隣同士ペアワーク） 5．Song: Wavin' Flag　（５分） （サッカー・ワールドカップ・テーマソング） 南アフリカ開催の意義，ソマリア情勢 母語ソマリ語なまりの英語→自信を持って使っていこう！ 6．ふりかえり（５分） 7．あいさつ（２分）	CD ワークシート② 色鉛筆 地図帳 アメリカの地図 ヨーロッパの地図 オーストラリアの地図 歌詞カード 今後の外国語活動へのメッセージ（応援）を送る ふりかえりシート	音楽 社会 異文化理解 社会 時事問題 道徳

（参考文献：渋谷徹著『ダメな英語活動　よい英語活動』明治図書
東後勝明 他編，*Junior Columbus 21 Book1, 2*　光村図書）

4　評価
・担任による，関心・意欲・態度面の観察評価
・振り返りシートによる自己評価と他己評価

力を合わせて国の場所を探す

見慣れない地図に苦戦

3 学ぶ喜び

児童が英語を使う必然性や，学んだ英語が通じた成就感や達成感，異文化間理解を体験的に学べるように各小学校にALT（外国語指導助手）が配置されている自治体も多いと思います。ただ，ALTに任せきりにするのではなく，担任とティームティーチング，または時に担任主体で授業することで，より意味のある活動となることは明白です。今後，小学校同士が各校の実践を共有して引き出しを増やすこと，そして小中学校が情報を共有して子どもの学びに見通しを持つことが，もっと学ぶ喜びに満ちた活動になる方策ではないかと考えます。

とっておきの英語・4

You are my best friend.

●津田塾大学大学院　野田 小枝子

写真：アフロ

You are my best friend.

初めは友達になどとてもなれないと思った人からこう言われたらどんなに嬉しいことでしょう。同じことを表現するのに，これ以上率直に気持ちを表す表現は見つかりません。

映画や小説などのジャンルから英語表現を取り上げ，英語とそのコミュニケーション機能を考えてみようというコラムの第４回目です。今回は，1つの脚本の中のセリフを５つご紹介いたします。

上の英文のコミュニケーション機能は，相手を評価する表現ということになるでしょう。その意味では第２回で考えたほめことばと似ているかもしれません。

この表現がしみじみとした響きで登場するのが，1989年にアメリカで公開された『ドライビングMiss デイジー（*Driving Miss Daisy*）』という映画です。日本では90年に公開されました。ジェシカ・タンディ（Jessica Tandy）が80歳の時にアカデミー賞を受賞した作品で，同じ映画でモーガン・フリーマン（Morgan Freeman）も助演男優賞にノミネートされました。今から22年前のことですから，その頃生まれた学生が今年は大学卒業の年になるわけで，感慨深いものがあります。

ジョージア州アトランタといえば南部の町ですが，この映画のストーリーはこの町に住む，ユダヤ系アメリカ人の老婦人デイジー（Daisy）と，お抱え運転手として雇われたアフリカ系アメリカ人男性ホーク（Hoke）との間に育っていく友情の物語です。

映画に描かれるのは，デイジーの72歳から97歳まで，ホークの60歳から85歳までの25年間の日々です。時代にすると1948年から1973年までということになります。

1958年のアトランタでのユダヤ教寺院爆破事件（映画では1966年という設定），60年代のキング牧師の演説などがこの映画にも描かれていますが，アフリカ系アメリカ人への差別による苦難はもとよりユダヤ系アメリカ人にとってもマイノリティーとしての辛い体験がある時代です。ガソリンスタンドでホークが使用を許されるトイレがないなどの場面が出てきます。

＜映画のストーリー＞

裕福な未亡人のデイジーは，昔小学校の教員をしていた女性で，自分で何でもしないと気が済まない性格。あるとき運転を誤って事故を起こし，息子のブーリー（Boolie）に運転手を雇うように勧められます。全く聞く耳をもたないデイジーに，ブーリーは運転手と車を用意してしまいます。運転手には「母はいろんなことを言うだろうけれど，給料は私が払っているのだから君を首にはできない。」と言い聞かせています。

デイジーにとってホークの存在は息子による自分の生活に対する干渉そのものであり，認めることができません。無視したり，何もさせなかったり，家政婦との会話まで禁じたりしてホークを拒絶しようとします。

ようやく近くの店に買い物に行くためホークの運転する車にしぶしぶ乗ったのは，ホークの勤務６日目のことでした。

以後，ホークはデイジーの生活の一部とな

り，家政婦のアイデラが亡くなってからはさらにホークがデイジーの生活になくてはならない存在になっていきます。

デイジーの気難しさ，頑固さは全く変わらないのですが，同調しながらやんわりと自己主張するホークも負けてはいません。

デイジーが95歳のある日，出勤してきたホークは，子どもたちの宿題がなくなったと取り乱しているデイジーに驚きます。ブーリーに電話で連絡後，デイジーをなだめるホーク。ふと我に返ったデイジーは，ホークの手を取り，“You are my best friend.”と言うのです。

やがて，デイジーは高齢者施設に移って生活をするようになります。映画の最後の場面では，感謝祭の日にブーリーに連れられデイジーのもとに来たホークが，パンプキンパイをデイジーの口に入れてあげ，それを至福のような表情をして食べるデイジーの姿が描かれています。

＜演劇『ドライビング・ミス・デイジー』＞

この映画はアルフレッド・ウーリー（Alfred Uhry）の演劇『ドライビング・ミス・デイジー』をかなり忠実に再現しています。映画の脚本を書いたのもウーリー自身です。ウーリーによれば，ニューヨークの非営利劇場で1987年に５週間上演したところ，たちまち評判になり，次の５週間を上演する頃にはもっと大きな劇場が必要になるほどの人気だったそうです。モーガン・フリーマンは舞台でもホーク役を務めていました。映画化された後もアメリカ国内外で上演されており，2013年２月にはアンジェラ・ランズベリーとジェームズ・アール・ジョーンズという配役でオーストラリアでの上演が予定されています。

右のセリフは，演劇の台本からの引用です。ホークの英語の発音・リズムはこちらのほうがよく表現されていると思います。映画では，わかりやすくなるように少しだけ書き直しています。フリーマンの演技が秀逸です。

＜この映画の「とっておき」セリフ5選＞

❶ ６日目にやっとデイジーが車に乗ったことを，ブーリーに電話で報告した時のセリフ。多分「よくやった。」と言っているブーリーに。

Yassuh, only took six days. Same time it take the Lawd to make the worl'.（Lawd=Lord）

まだ6日ですから。神様が世界をお創りになったのと同じだけの日数ですから。

このようなセリフを聞くとはっとさせられます。ホークは文盲ですが，旧約聖書の創世記の話は小さい頃から親しんだ身近な話なのです。ホークの精神世界を，教会の美しいゴスペルの響きのかなたに想像してみたくなることばです。

❷ Miz Daisy, you needs a chauffeur and Lawd know, I needs a job. Let's jes' leave it at dat.（jes'=just）

奥様，．．．奥様には運転手が必要で，私には仕事が必要です。もう，素直にそれを受け入れることにしませんか。

デイジーが最も嫌うのは自分の裕福さを周囲に吹聴することであり，運転手を雇うことは主義に反します。そこでホークが言うことにいちいち腹を立てますが，これはそのときのホークの反撃です。シンプルで説得力があることばです。

教育を受けて教師として勤務していたデイジーよりも，教育もろくに受けず，最低賃金の仕事につければ運がよいという生活をしてきたホークのほうが，客観性，論理性において優れたことを言っているのも大変楽しめる部分です。

動詞の形について一言申し添えますと，ホークの英語では，３人称単数現在形には-sがつかず，そのほかの人称の現在形には-sがついています。過去形のマーキングもないことがあります。そういう文法規則をもつ南部黒人方言として，脚本では描かれています。

❸ Daisy: You know your letters, don't you?

Hoke: My ABCs. Yassam, pretty good. I jes' cain' read.
Daisy: Stop saying that. It's making me mad. If you know your letters then you can read. You just don't know you can read.
デイジー：文字は知っているでしょう。
ホーク：ええ。ABCはよく知っています。ただ読めないんです。
デイジー：おやめなさい。怒るわよ。文字を知っていたら読めるはずよ。ただ読めるっていうのがわからないだけよ。

亡くなった夫の墓参りを欠かさないデイジー。この日は墓地で知人の墓のところまで花を持っていってと頼まれたホークは，Bauerという名前が読めないので墓が見つけられず，文字が読めないことが暴露されてしまいます。

その時のデイジーの反応が，何年も前の教師をしていたころに戻るので面白いところです。この後，buhのような音がするのはどの文字？erの音はどの文字？とホークに聞き，BとRがわかれば「最初がB，最後がR」の墓石を見つけられると指導します。

「その間の文字は今気にしないでいいんですか？」「いいの。今は見つけられればいいの。」というやり取りもすばらしく，お見事というほかありません。

ホークにとっては単語を「読む」ことを教わった最初の授業だったわけです。この後デイジーがペンマンシップをプレゼントするなどして，ホークは読み書きを学んでいきます。

デイジーの指導は，今に置き換えれば，フォニックス的指導の初めの一歩です。デイジーが教師をしていたのが1930年代頃までだとするとその頃のアメリカでの母語での読みの指導ということになります。そういう面白さもありますが，一度に教え過ぎないところなどが，非常に示唆に富んでいると感じます。

❹ Daisy: And wipe up what you tracked onto my kitchen floor.
Hoke: Now Miz Daisy, what you think I am? A mess?
デイジー：台所の床を靴で汚した跡を拭いておいて。
ホーク：私を何だとお思いですか。汚れのかたまりですか。

ある冬の日，道が凍りつき，家の中は停電になってしまいます。ところがそんな日でもホークがデイジーの分のコーヒーを買ってしっかり出勤してきます。“How sweet of you, Hoke.”というデイジーのことばには感動が表れています。

途中で何台もの車が滑って衝突している中を駆けつけたホーク。せっかくコーヒーを持ってきてもらったのに何とひどいことを言っているのだと思われるかもしれませんが，実はいつもの掛け合いです。2人の間に強い信頼関係が生まれているのがわかります。

このすぐ後，デイジーの息子のブーリーが心配して電話をかけてきますが，デイジーは「来なくても大丈夫，ホークがいるから。ホークは本当に気がきくのよ。」と答え，ブーリーに「おや，番号を間違ったかな。前代未聞だ。おふくろがホークをほめてるなんて。」と言わせています。

❺ 最後はもちろん“You're my best friend.”です。このような友達がいてしみじみそれが言えるときというのは，本当に人生のうちの輝ける瞬間だと思います。

Daisy: Hoke?
Hoke: Yassum?
Daisy: You're my best friend.
Hoke: Come on, Miz Daisy. You jes'--
Daisy: No. Really. You are. You are.
(*She takes his hand.*)
Hoke: Yassum.

参考文献:Uhry, A. (1988). *Driving Miss Daisy.* NY: Theatre Communications Group.

今ドキ
英語事情

All in the family

Peter J. Collins
Tokai University

"The family – that dear octopus from whose tentacles we never quite escape nor, in our inmost hearts, ever quite wish to."

So said a character in Dorothy Smith's 1938 play *Dear Octopus*. Smith was describing a paradox familiar to many. We know we can never truly break away from our family. On the other hand, if we're honest with ourselves, we have to admit that we don't really want to do so. The image she presents is a startling one, the family as a "dear octopus," because it is, in itself, a contradiction in terms. Smith understood that many in her audience thought of octopi as nasty, scary creatures. Adding "dear" to the metaphor would highlight the dual nature of the family.

The family is a particularly dynamic social institution, reflecting realities and attitudes that are continually evolving. In order to express new notions of the family and its members, English speakers and writers coin new words and phrases. If the new terms are self-explanatory, listeners and readers will immediately grasp their meanings. And if they are relevant to the experience of enough people, they may find their way into common use and established dictionaries.

The new term **babyoddlers** is one example that strikes me as awkward, but potentially helpful. It's what is known as a portmanteau word, meaning a combination of two or more other words, in this case "baby" and "toddler." A babyoddler is a child in that brief period between the two phases. The word **kidlet**, meaning a small child, is less precise, but sounds much cuter. It reminds us of words like "piglet" or "booklet," where the suffix "-let" denotes a smaller version of the root word.

On the other end of the spectrum are unflattering descriptions like **rugrats** and **ankle-biters**. The first known use of rugrats was in 1975, and by the '80s there was a Canadian children's band called The Rugrats. On top of this, a popular animated TV show in America called *Rugrats* ran from 1991 to 2004. The show focused on a group of imaginative toddlers and their everyday lives. Surprisingly, the term ankle-biter is much older than rugrats; it was first recorded in an 1850 *Harper's Magazine* story. I love the image of babyoddlers crawling around and biting people's ankles, but I suspect the term was coined by someone with an intense dislike of children.

The word "teen," abbreviated from "teenager," has also been in use since the 19th century. **Tween**, however, didn't emerge until the late 1980s. It refers to a child between the ages of about ten and thirteen, or "between" childhood and the teen years. The word "pre-teen" also covers this period, but tween and **tweenie** have somewhat more negative connotations. Tweenies are often thought of

as children who, in their way of dressing, speaking, and acting, pretend to be more mature than they really are, which some people find offensive. The BBC, in an effort to help children navigate this difficult phase, aired a show called *Tweenies* from 1998 to 2003. Confusingly, perhaps, the term **pre-tween** has also been coined, to describe a child from about six to nine years old.

Twins hold a certain fascination for many people, and the term **wombmates** has recently been invented in their honor. A play on the word "roommates," it reminds us that twins once shared a single womb – their mother's. Another wordplay is **twinchronicity**, with its origin in the word "synchronicity." This describes a special bond between twins which may result in coincidences in their thoughts, attitudes, and experiences, as if their brains are synchronized.

Turning to adults, many are finding that economic times are tough these days. According to the Pew Research Center, a think tank based in Washington, D.C., more are back home and living with their parents than at any time since the 1950s. This group of adult children is commonly referred to in the media as the **boomerang generation**. Unable to pay off their college loans or land stable jobs, many Americans in their twenties and thirties wind up becoming **boomerang kids**. For many **empty-nesters** (parents whose children have all grown up and left home), having a 25-year-old **homing pigeon** return to live with them can be a mixed blessing.

Whether their children are pre-tweens or boomerang kids, mothers and fathers may feel the need to establish a **parentarium** somewhere in their home. The suffix *-arium* indicates a special place for a specific thing or activity, as seen in words like "planetarium" and "auditorium." A parentarium is a room or space where parents can retreat when they need some time to themselves. My own childhood home didn't have this kind of designated **childfree** zone; when my sister and I started driving my parents crazy, they would simply send us to our rooms, making the entire first floor a parentarium!

One modern parent who may feel the need to set up a parentarium is the **househusband**. Another portmanteau word, househusband describes a father who acts as the primary homemaker and caregiver to a couple's children. It was coined in the 1970s as a joke when women began objecting to the term "housewife" as sexist. Thirty years later, there is far less stigma attached to being a **stay-at-home dad** or **stay-at-home father**. Other labels range from the gender-neutral **house-spouse** to the humorous **Mr. Mom**, originally the title of a 1983 movie in which a woman works outside while her husband manages things at home.

I imagine it must be hard to **snoopervise** from inside a parentarium. A play on the word "supervise," snoopervise refers to parents snooping on their children. When I was growing up, parents might simply rummage through their son's dresser drawers or read their daughter's diary, looking for evidence of bad behavior. These days, however, **snoopervisors** need to be tech-savvy, able to monitor their children's use of various social

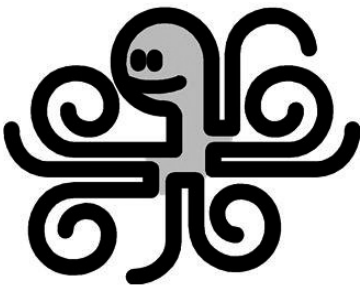
and other media.

Whether or not they're snoopervisors, some parents don't trust their children to think for themselves or fight their own battles. The term **helicopter parents**, similar to the Japanese concept of "monster parents," refers to mothers and fathers who continually hover over their children like helicopters, supervising every aspect of their life. Helicopter or **Velcro parents** (who stick to their kids like Velcro) seem to be even fiercer when their children are away at college. They've been known to complain to professors about their children's grades and to call every morning to wake up their sons and daughters. Some even get involved in their children's salary negotiations later on!

Backseat parents, on the other hand, offer unsolicited and unwanted advice on how other parents should raise their children. This term is a variation on "backseat driver," meaning a passenger who nags the driver about their driving. And just as some backseat drivers don't even have driver's licenses, some backseat parents have never raised children of their own. A **sanctimommy** can be just as unpleasant. Another portmanteau word, sanctimommy combines "sanctimonious" and "mommy" and describes a mother who enjoys pointing out others' parenting mistakes. Even more negative is the phrase **drive-by parenting**, which derives from the violent image of "drive-by shooting." Imagine that you're at an amusement park with your children. A total stranger turns to you and says, "You know, you really shouldn't let your kids drink so much soda," then turns away. You've just been a victim of drive-by parenting.

Backseat parents and sanctimommies are a nuisance, especially in otherwise **family-friendly** places like swimming pools or playgrounds. Nobody thinks children should be allowed to run around in a four-star French restaurant. But visitors to **kid-friendly zones** like beaches and petting zoos know that they're going to be surrounded by other people's children, and will hopefully suppress the urge to engage in drive-by parenting.

No matter how our perceptions of the family continue to evolve in the future, our sense of **familyship** is likely to remain constant. Familyship describes the pride and pleasure we take in being members of our family. Whether we're enjoying a **familicious** movie or TV show (one the whole family can enjoy!) or calling our parents from across the globe to wish them a happy birthday, we'll always be tangled in the tentacles of that dear octopus!



編集部からのお知らせとお願い

平成24年度の教科書に下記の訂正箇所がございます。ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

学年	頁	行	原文	訂正文
1年	65	Let's Try	Our family has two bikes.	We have two bikes.
	90	脚注2		（next to ～ の後に挿入）*about*
	105	脚注1		（listen to ～ の後に挿入）*hard*
	106	脚注2		（go shopping の後に挿入）*watch*
	127	Activity 2-2	play soccer after school	play soccer at five
	131	側注9	kind of ～	some kind of ～
	149	中列15	（areの項）助〔are ～ingで〕～している…108	助〔are ～ingで〕～している……110
	151	右列29	（hourの項）over ～ *hour(s)* ～時間以上…136	（削除）
2年	42-43	16／7, 10	*Dotombori*	Dotombori
	47	And More 右列6	stuck < stick 困る	stuck < stick ～を困らせる No way! 絶対にいやだ。（stuckの行の下に挿入）
	49	側注5		（call out の下に挿入） we'll = we will
	51	側注2		（**bread** [bréd] の下に挿入） **himself** [himsélf]
	119	脚注2		（**twice** [twáis] の後に挿入）**fine** [fáin]
	143	右列10-12	**anything** [éniθiŋ] 代①〔たずねる文で〕何かあるもの……**28** ②〔打ち消しの文で〕何も（～ない）**94**	**anything** [éniθiŋ] 代 _〔たずねる文で〕何かあるもの……**28** （削除）
	143	右列26	（areの項）②〔are+過去分詞で〕～される…**110**	②〔are+過去分詞で〕～される…**114**
	144	中列下から2		（**bored** [bɔ́:rd] 形 退屈（たいくつ）した……**21** の下に挿入） **boring** [bɔ́:riŋ] 形 退屈させる… **29**
	145	右列17	cry [kráɪ] 動①泣く……**71**	cry [kráɪ] 動①泣く……**89**
	154	左列19-20	（tellの項）	（②〔tell ～ to ...で〕～に…するように言う…**126** の下に挿入） ③〔tell ～ about ...で〕～に…について話す…**137**
	154	左列30	thank [θǽŋk] 動 ～に感謝する……8	thank [θǽŋk] 動 ～に感謝する……86
	155	右列下から12		（window [wíndou] 名 窓……120 の下に挿入） **windy** [wíndi] 形 風の強い……**112**
	156	中列下から3	could [kəd; kúd] 助 canの過去形	（削除）
	156	中列下から2	stuck [stʌ́k] 形 困った	stick [stík] 動 ～を困らせる stuck [stʌ́k] 動 stickの過去分詞形
	156	中列下から1	a few days later 数日後	a few days later 数日後（little by little 少しずつ の下に移動）
	158	3, 11, 16	原型	原形
	159	2, 9	原型	原形
3年	24	脚注	肯定文（こうてい）で	否定文で
	46	側注3		（**fair** [féər] の下に挿入） **star** [stá:r]
	49	15	in 1986.	in 1988.
	59	Activity 2-B	B. picture painted by Hokusai	B. picture painted by Tezuka

学年	頁	行	原文	訂正文
3年	126	脚注2		（grab(bed) [gráeb(d)] ～をつかむ　の後に挿入） stare(d) [stéər(d)] じっと見つめる
	126	脚注4		（you better = you had better ～したほうがいい，～すべき　の後に挿入）　stare at ～ ～をじっと見つめる
	139	左列11	biscuit [biskit] 名 小型の丸いパン･･･**23**	biscuit [bískit] 名 クッキー･･････**23**
	139	左列下から19	born [bɔ́:rn] 形〔be bornで〕生まれる……18	born [bɔ́:rn] 動〔be bornで〕生まれる……18
	139	中列25	buy [bái] 名 ～を買う……12	buy [bái] 名 ～を買う……43
	139	中列下から1-2	can [kn; kǽn] 助 ①～することができる……21	can [kn; kǽn] 助 ①～することができる……23
	141	中列下から7	eat [i:t] 動（～を）食べる……23	eat [i:t] 動（～を）食べる……31
	143	左列4	friend [frénd] 名 友だち……10	friend [frénd] 名 友だち……23
	147	左列17	melt [mélt] 形 溶ける……90	melt [mélt] 動 溶ける……90
	147	右列16	（needの項）名 必要性･････････････････**49**	（削除）
	158	3, 14, 19	原型	原形
	159	2, 13	原型	原形
	裏見返し（左）	脚注 左列1	① **among** mountains	① **among** the mountains

平成24年度用中学校教科書準拠・教授用ソフトシリーズ

デジタル教科書 ともに学ぶ ともに考える

ONE WORLD

English Course

1～3年

文字や絵、写真が大きくなるからわかりやすい！

各学年価格 73,500 円（本体+税）

※各学年ごとのお求めとなります。学年をまとめた価格ではありません。
※本記載の内容，製品の仕様は予告なく変更する場合があります。

英語教育 通信　*ONE WORLD* Info　〔2012 年 秋号〕　2012 年 9 月 30日　発行

編　集：教育出版株式会社編集局　　発　行：教育出版株式会社　代表者：小林一光
印　刷：大日本印刷株式会社　　発行所：教育出版株式会社
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 2-10　　電話　03-3238-6864（お問い合わせ）
URL　http://www.kyoiku-shuppan.co.jp

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は，科学技術の進展や国際化，情報化，高齢化などによって，今，大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で，人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには，人や自然を大切にしながら，共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは，この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め，社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社　〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL：011-231-3445　FAX：011-231-3509
函館営業所　〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一生命ビルディング 3F
TEL：0138-51-0886　FAX：0138-31-0198
東北支社　〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL：022-227-0391　FAX：022-227-0395
中部支社　〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL：052-262-0821　FAX：052-262-0825
関西支社　〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL：06-6261-9221　FAX：06-6261-9401
中国支社　〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL：082-249-6033　FAX：082-249-6040
四国支社　〒790-0004 松山市大街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL：089-943-7193　FAX：089-943-7134
九州支社　〒810-0001 福岡市中央区天神 2-8-49 ヒューリック福岡ビル 8F
TEL：092-781-2861　FAX：092-781-2863
沖縄営業所　〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F
TEL：098-859-1411　FAX：098-859-1411

表紙写真　アメリカ　バーモント州　ファームハウス（©アフロ）